

1 『七つの夜』 Siete Noches

「訳者あとがき」によれば、1977年、ボルヘス78歳の時のコリセオ劇場での連続講演を文字化したもの。七つの話が収められている。「第一夜 神曲、第二夜 悪夢、第三夜 千一夜物語、第四夜 仏教、第五夜 詩について、第六夜 カバラ、第七夜 盲目について」である、その後にロイ・バルトロメウによる「エピソード」がついており、1980年2月12日の日付がある。全体の構成から分かるとおり、西洋・東洋の神秘思想を含む宗教や文学について語っている。

「第三夜 千一夜物語」：西洋人にとって、「東洋とは日出（いず）る処」「Morgenland=朝の地」であり、「当方の=oriental」という言葉には東方のサファイア、朝の黄金（oroは黄金）の意味もある、東洋と言えはまずはイスラム感覚の東洋で、それからインドより来たの東洋へとイメージを広げるのではないか、それが『千夜一夜物語』がもたらしたものだ、とボルヘスはまず語る（84~85頁）。『千夜一夜物語』は、まずインドで中心となる一連の物語が作られ、ペルシアで形が整えられ、アラブ風に変形され、エジプトに行き着く。15世紀末だ。この時は『千の物語』だった。が、一を加えた。（87~88頁）「それを読むと、私たちはある遠い国にいるように感じられる」（88頁）。1704年、フランスのガランが翻訳して以来、ロマン主義のバイロンやユゴーらとともにヨーロッパ人の意識に入る（82頁）。「アラジンと魔法のランプ」は、原語版ではなく、ガランが付け加えたのだろう。この物語を語る語り部たちと同様、ガランもまた物語を作りたくなかったに違いない。（96~97頁）この物語は「今もなお成長し続けている、あるいはあらたに作り直されている」（98頁）。

「第四夜 仏教」：私も仏教に関心があるので読んでみたが、私（たち）の理解とは少し違う。ボルヘスがこれを語ることで、アルゼンチンの聴衆は東洋の仏教についてある形で理解しつつ、ある形で誤解するかも知れない。（が、私（たち）も西洋の思想について理解と誤解を積み重ねているに違いない。）ボルヘスは鈴木大拙の本を援用する（103頁）。また日本人の禅宗の友人とも長く議論をしたようだ（106頁）。仏教では輪廻転生を語る、それはピタゴラスにも近い（118頁）、苦悩の根源、生命の根源の思想はショーペンハウエルやベルグソンにも近い（123頁）、など、西洋人にわかるように解説する。最後にボディダルマに言及する。「私にとり仏教は、・・救済に至る道」だ、と「敬意を込めて」語る（130頁）。全体に禅宗の系統から知識を得ているとの印象だ。

「第七夜 盲目について」：講演時ボルヘスはすでに視力をおおかた失っていたので「盲目について」があるのだろう。そこでは視力を失った人びとへの言及がある。ボルヘスと同じ図書館長グルーサック、ホセ・マルモルや、ホメーロス、ミルトン、プレスコット、ジョイス、アブデラのデモクリトスらに言及する。ホメーロスの詩は聴覚に訴える。ジョイスの英語も音楽性がある。「盲目はひとつの生活様式である、まったく不幸というわけではない生活様式である」（217頁）、「それらが与えられたのは、私たちに変質させるためであり、人生の悲惨な状況から永遠のもの、もしくはそうありたいと願っているものを作らせるためなのです」（219頁）、「盲人は、人々の愛情に包まれていると感ずることができる。人々は盲人に対して常に善意を感じるのです」（220頁）とボルヘスは言う。

（中南米の文学）フェンテス『アルテミオ・クルスの死』、ファン・ルルフォ『ペドロ・パラモ』（メキシコ）、カブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』『族長の秋』（コロンビア、カリブ海）、バルガス＝リョサ『緑の家』『密林の語り部』『ラ・カテドラルでの対話』（ペルー）、アレホ・カルペンティエル『失われた足跡』（キューバ、ベネズエラ）、イザベル・アジェンデ『精霊たちの家』（チリ）、コルタサル『追い求める男』（アルゼンチン）、ボルヘス『伝奇集』『アレフ』『七つの夜』（アルゼンチン）など。